

メープルレター（68）

スノーボード

長い心地良い晩秋があつという間に吹雪に変わり、寒い冬になりました。あーやはり、ここは北国とため息をついています。長い冬が待っています。

この時期に良く聞く言葉がスノーボード。雪に舞う可愛い小鳥を想像しそうですが、寒い所から脱出して暖かい国、特にフロリダに移住し、春先にまた戻って来る人達のことを言います。大半は、クリスマスを家族で過ごし、それから南下していきます。フロリダにはフランス語を話すケベック村があるほど、ケベックから移動していく人達が多いのです。最近、滞在先の補償をするスノーボード保険の宣伝がテレビで良く流れています。

南下する人たちは、フロリダに家やコンドミニアムを持つ人やレンタルする人もいれば、ケベックからキャンピングカーで時間をかけて南下し、そのままその中で暮らす人もいます。ともかく、大移動が始まります。友人の一人も、つい最近、マイアミのコンドミニアムに移って行きました。彼女が住んでいる地区は、門で閉ざされた2-3千人が住むリゾート地区だそうです。治安があまり良いとは言えないアメリカでは、こうして身の安全を守りながら快適に暮らしていくのでしょうか。その地区にはスーパー、レストラン、様々のブティックなど日常生活に必要な施設が全てあり、門を出なくても暮らせるようです。友人のご主人は、ここで毎日ゴルフをし、友人はテニスをし、夕食後は軽く二人で散歩をして日が終わっていくと話していました。

友人は、車がないと暮らせないアメリカの暮らしを考えて、エージェントを見つけ、自分の車に必要な品を精一杯詰め込み、車ごとモントリオールの自宅でピックアップしてもらい、フロリダの自宅まで送り届けてもらうデリバリーサービスを利用しているのだそうです。往復こうして車と荷物を運んでもらい、夫婦二人は、飛行機でゆったりと出かけていきます。車のデリバリーの経費は、毎回2000-3000ドルとそれなりにかかり、マイアミの自宅に送り届けられるのは3日後。

「年をとると、頑張らない、いえ、頑張れないから、これが最適なよ。」

アパートにつくと荷物は部屋についているので、気が楽だと話していました。今頃は、のんびりと暖かい国で暮らしていることでしょう。そうそう、フロリダはトランプのテリトリーなので、トランプの悪口を言ったら袋叩きになるとも言ってはいました。

11月半ばのこと、久しぶりにトロントに車で出かけてきました。カナダ横断の高速道路を西に向かうこと約6時間。膝の回復状態を思うと、マダム田中には挑戦だったのですが、思い切って出かけていきました。コロナ禍で中止になっていたトロント日系文化会館の剣道大会とカナダ昇段審査会にドリトル先生が招待されていました。ドリトル先生は、剣道仲間との再会を楽しんでいました。しっかりと刺激も受け、剣道を続け、日本でもう一度八段の昇段審査を受ける勇気も湧いてきたようです。

昇段審査には、ドリトル先生のマギル道場の生徒たちだけでなく、ドリトル先生の次男が6段を受けることになっていました。ど田舎のフレデリックトンで一人でどうにか剣道を続けてきた次男には大きな挑戦だったようです。毎日、筋トレと素振りを45分続けて来た成果がでたのかもしれませんが。無事合格しました。審査は試合形式で行われ、勝ち負けではなく、立ち合いの所作から、その打ち方が審査の基準にかなうものでなければなりません。何本か決めた次男の打ちは完璧なものでした。6段の合格者5人のうち、4人は韓国人、たった一人の欧米人が義理の次男でした。カナダの剣道界はじりじりと韓国勢が占めてきているようです。審査合格の後には、トロントのダウンタウンに繰り出しました。日系会館や滞在先のホテルはトロントの郊外にあるので、ダウンタウンまでは高速を通るか田舎道を通り、少し時間がかかります。次男が運転をすると、田舎道を通ることになり、仕事柄（大学で森林と地球温暖化の研究）、木の種類や根の張り方などの説明を聞くことになります。マダム田中は、根っこなどどこに張ってもどうでも良いと思うのですが、植える木の種類や森の将来を思うと大事なことなようです。もっとも、自宅に戻った2-3日後に、次男の記事が写真入りで（なかなか美形で、フレデリックトンのアランドロンと呼んでいるのですが、着ている物がダサイ）サイエンスにでていましたから、学術的な理論だったのでしょう。

ダウンタウンのシックな所に、やや皆でおしゃれをして（ドリトル先生はアルマニーのスーツを着込んでいました）、喫茶店に入ってホットココアで一息、予約しておいたイタリアンレストランでおいしいアンティパスタやピザを食べながら、キャンティーで乾杯して合格をお祝いしました。次男は、子供のころに帰ったかのように、幸せそうにゆったりと楽しく過ごしてい

ました。マダム田中の膝ですか、やはり、往復6時間ずつ、計12時間のドライブの後は、しくしくと痛みました。まだ、膝を折っての長旅は無理なようです。重いスーツケースも引きずれないとつくづく思った日々でもありました。

先週のこと、前回のメープルレターに登場した友人（義妹の安楽死を語る）が、いけばなインターナショナルの例会の帰り道、車の中で。

「明日、義妹のお葬式なのよ。」

「やっぱりもう亡くなったのね。」

「そうなの。皆でお葬式をすることになっているの。ケベックに行ってくるわ。義妹は娘と静かに自宅で最期を迎えるつもりだったんだけど、臓器提供を申し出ていたらしくて、病院で最期を迎えることになってしまったのよ。」

「臓器提供？」

「心臓と腎臓は健康だからって。命の最後と臓器の移植手術が同時進行だったらしいわ。」

「なんと壮絶な最後。お義妹さんの心臓は誰かの体の中で、彼女の腎臓はもう一人の誰かの体の中で今でも生き続けているのね。」

「そういうことになるのよね。」

「姪御さんは辛いでしょうね、それでも。」

「そうだと思う。ずっとお母さんの傍で過ごしてきたし、ボーイフレンドも彼女を支えていてくれるから、切り抜けていくと思うけど。しっかりしていて、もう、勉強に戻っていると思うわ。」

「何を勉強しているの。」

「ヤンキーだった姪は、去年、突然目覚めて、金持ちになりたいからと経営学院（修士レベル）に入って経済を勉強し始めたのよ。」

「素晴らしい。しっかりお金を稼いでもらいたいわ。」

そんな話しをしているうちに、近道をしようとのった高速の出口を出間違え、遙か遠くをぐるぐる出たり入ったりしながら、方向音痴の二人のドライブは続くのでした。